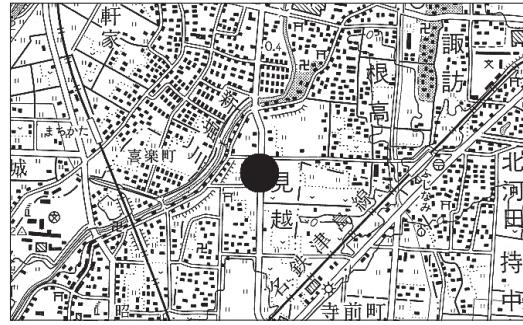


かわだ
川田遺跡

所在地 海部郡佐織町大字見越字川田地内
 調査理由 県道一宮・弥富線建設工事
 調査期間 平成11年8月～12年1月
 調査面積 1,800 m²
 担当者 春日井毅・伊藤太佳彦・木川正夫



調査地点 (1/2.5万「津島」)

調査の経過 調査は、県道一宮・弥富線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。平成11年8月から平成12年1月まで、1,800 m²をA・B区の2つの調査区に設定して実施した。

立地と環境 川田遺跡は、佐織町中心部から津島市寄りの佐織町大字見越字川田に所在する。大字見越は海拔0メートル地帯が面積の半分近くを占め、一般的に海拔0メートル以上を宅地と畑地に、0メートル以下を水田に利用しているようである。遺跡は領内川とその支流の新堀川の右岸の沖積地に立地しているが、江戸時代以降の河川改修で付近の河川は流路をかなり変更しているので、遺跡の基盤層の砂は木曾川水系の河川によるものであろうが、具体的にどの河川の堆積物かは不明である。付近の遺跡として、南東方の津島市域には弥生時代の埋田遺跡が、東方には日光川を挟んで古墳時代初期の奥津社古墳が、同じく東方に奈良時代の諸桑廃寺等の遺跡が分布する。今回の調査区付近は、江戸時代後期の村絵図によると畑地であり、現在も調査区の東西両側は畑地である。畑の表面の標高は約+30 cm、古墳周溝の検出面の標高は約-50 cm、古墳周溝の底部の標高は約-110 cmであった。付近に弥生時代や古墳時代の遺跡がかなり存在することから、川田遺跡に古墳が造営された頃にはすでに海岸線はかなり南方にあったと考えられる。

調査の概要 川田遺跡は古墳時代から中世（鎌倉時代）へと続く複合遺跡である。検出された遺構・遺物は、古墳時代（5世紀末）、古代（7世紀中葉～8世紀）、中世（平安末～鎌倉時代）の3時期に区分できる。

本年度の調査成果としては、古墳時代（5世紀末）の埴輪や須恵器・土師器を伴う古墳の周溝が確認されたこと、その古墳の周溝を古代（7世紀中葉）に再利用して須恵器・土師器等を遺棄した溝が確認されたこと、古墳を削平しながら中世（平安末～鎌倉時代）に山茶碗片を伴う土坑墓が70基余り確認されたことなどがあげられる。

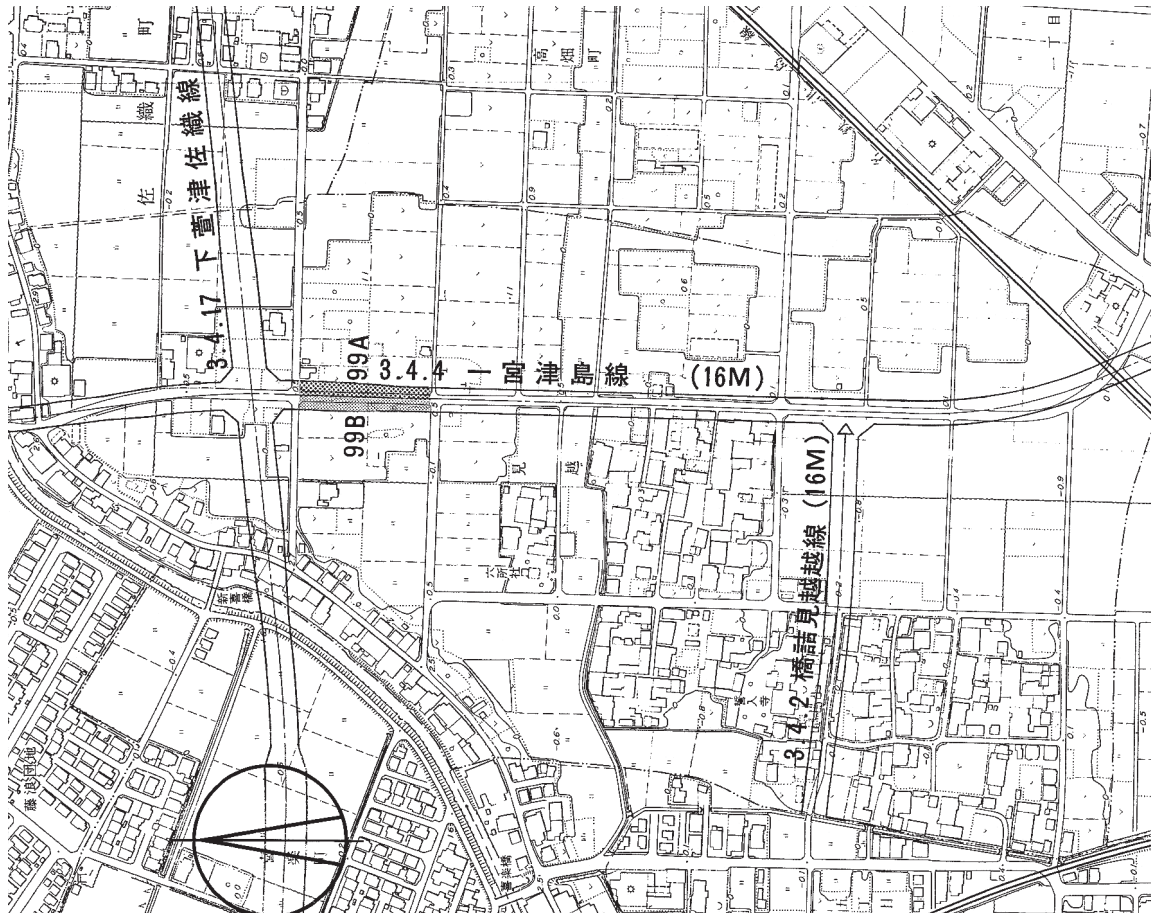
古墳時代 古墳時代（5世紀末）の遺構としては、調査区中央付近で円墳と思われる古墳（S Z 01）の周溝（A区S D 25・28・B区S D 06 下層）が検出された。円墳とすれば周溝の中心から中心までの直径は約22メートルである。A区S D 25の南とA区S D 28の間にはそれぞれの溝に並行するかのように浅溝S D 30と29（周溝検出面から深さ約20 cm。S D 29で埴輪片若干出土）が検出されている。そして、S D 25は東壁に接近するにしたがって浅く収束し、並行するS D 30も閉じているので、東壁にもぐった辺り（つまり円墳の主体部から見て北東方向）に陸橋があった可能性がある。埋葬施設については検出されなかった。墳丘部にそれがあったとすれば、中世にはすでに削平されていたと考えられる。また、S

Z 01 の南方ではほぼ同時期の溝が数条（A 区 S D 27・31・32・33・34・B 区 S D 04・05・08・15・18）検出された。この時期の遺構からの主な遺物としては、円筒埴輪片や形象埴輪片（S Z 01 南辺周溝付近で多く、北辺では最下層ではりついた状態で若干出土した。形象埴輪は盾形と思われるものがある。）・須恵器（H -11 式期）・土師器・馬歯（S D 25・28 の最下層）などがあげられる。

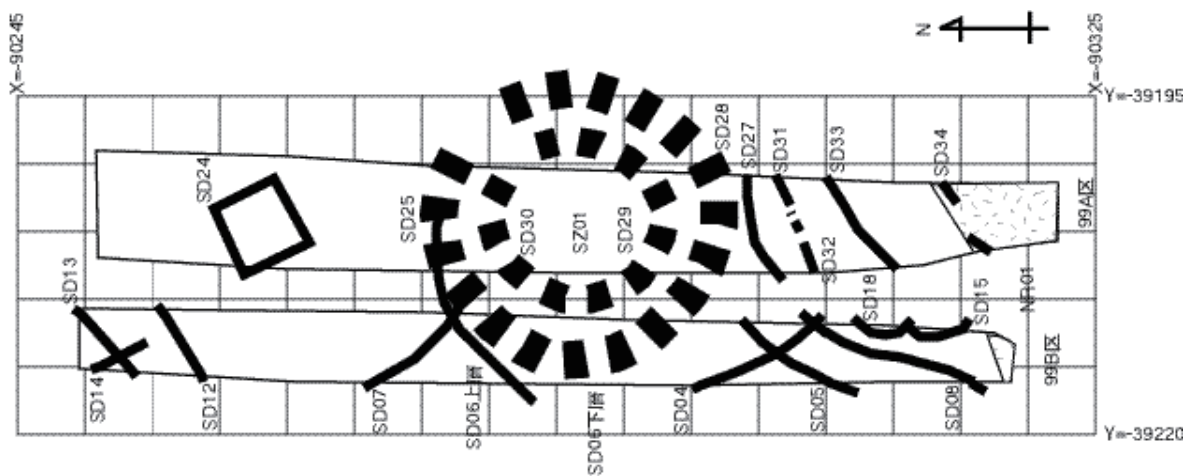
古 代 古代（7 世紀中葉）の遺構としては、調査区中央付近で古墳の周溝を再利用した溝（A 区 SD25・B 区 S D 07）や北部で一辺約 5 メートルの正方形にめぐる溝（A 区 S D 24）、それとほぼ方向の合っている溝（B 区 S D 12・13・14）等が検出された。B 区 S D 06 上層は古墳周溝である S D 06 下層の北西辺をさらに深めるように掘られており、B 区西壁へ抜けていく。以上の溝は、ほぼ北東方向に平行または垂直なので、この時代にはなんらか（例えば当時付近にあった河川）の規制により方向付けられていた可能性がある。主な遺物としては、A 区 S D 25 から須恵器（I-17 式期。器種は多岐にわたる）・土師器・轆の羽口など、A 区 S D 24 から土師器・管状土錘の集積（約 30 点）があげられる。また、A 区南東部の上層の遺構や最南部の自然流路（A 区 N R 01）から 8 世紀の瓦片が若干出土しているので、付近に古代寺院があった可能性が考えられる。

中 世 中世（平安末～鎌倉時代）の遺構としては、A 区北東部と B 区中央中軸部で主に南北方向に長辺をとった方形土坑が 70 基余り検出された。単独のものもあるが、ほとんどが切り合っている。掘り形は立ち上がりが急な箱掘りで深さ数十 cm。大きさは大小さまざまあるが、平均的なもので長辺 180 cm、短辺 90 cm 程度である。主な遺物として山茶碗片等が出土している。墓穴として掘られたと思われるが、人骨等の遺体はいっさい出土していない。A 区北部のピット（P 227）からは完形の山茶碗（平安末）が 1 点出土している。また、最南部の自然流路（A・B 区 N R 01）は中世のものと考えられる。A 区南端で掘りきった底部の標高は - 170 cm であり、さらに南へ落ち込んでいくようである。主な遺物は、古墳時代の溝を削って混入したと考えられる 5 世紀末の須恵器・埴輪片、古代瓦（8 世紀）、山茶碗、馬歯・馬骨などである。

ま と め 今年度の調査によって、主に 3 時期に区分されることが分かったが、住居跡などの直接生活に関係する遺構はいずれの時期においても検出されなかった。生業の痕跡として古代の土錘群や轆の羽口が出土しているので、付近に居住域はあったと思われる。現在調査区南東に隣接するように墓地があり、江戸時代後期の村絵図にその墓地とその南西に位置する見越村の集落がすでに描かれているので、中世にはすでにその集落が存在し自然流路を挟んで北東方に墓地が形成されていたと思われる。なお、滋賀県醒ヶ井松尾寺所蔵鰐口銘文に「尾州海西郡三腰（現在の見越）極楽寺金鼓 弘安六年癸未（1283 年）十月十八日大工西善」とあるのが「みこし」の地名の初見である。（木川正夫）



第1図 調査区位置図 (1 : 5,000)



第2図 古墳時代・古代遺構配置図 (1 : 600)



A区 SD 25・28上層（北より）



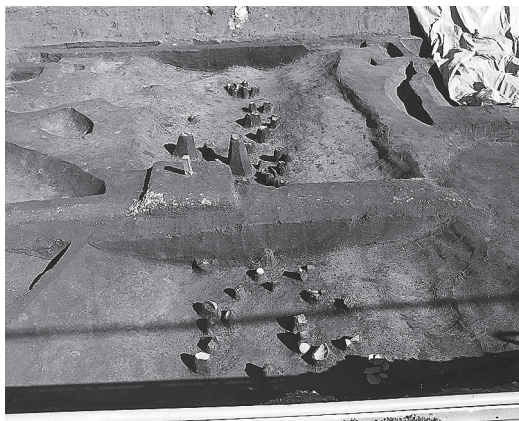
B区 SD 06（北より）



A区 SD 28 埴輪片・馬歯出土状況（南より）



B区 SD 06 須恵器等出土状況（西より）



A区 SD 25 須恵器等出土状況（西より）



A区 SD 25 中央部須恵器等出土状況（西よ



A区 SD 24 管状土錘群出土状況（南より）



A区 ピット 227 山茶碗出土状況（北より）